

市史だより

がちまやあ Ga či-majaa

第24号・2011年9月30日(金)発行
年3回 (5・9・1月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2203
沖縄県宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先

☎ * { * ☎ * ☎

☎ (098) 893-4430

Fax (098) 893-4434

E-Mail: Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp

※宜野湾市役所のホームページで、バックナンバーも公開中!!!

HP: <http://www.city.ginowan.okinawa.jp>

一致団結!



新城ってどんなところ?

今回の特集は新城! 宜野湾市の北東部に位置し、普天間や喜友名に隣接した住宅街ですが、そこに至るまでの集落移動の歴史をご存知でしょうか?

新城の発祥は現在の場所から西北方約500mの新城下原にあった7戸からだと言われており、実際に屋敷跡や井泉などの集落跡が残っています。

そして、そこから南東の新城原へと移動して戦前の新城を築いたとされ、“ものいう岩”という民話も伝わっています。宜野湾並松に沿った戦前の新城は、農家が主な小さな集落でしたが



経済的に豊かで、赤瓦屋も多くありました。村遊びが盛んで、6年に1回(寅年と申年)のマールアシビは、宜野湾村内はもちろん、村外からも多くの見物客が訪



新城青年会
第15回 宜野湾市
青年エイサー祭りにて (2011.8.27)

れました。なかでも四人一組で八組を作り、各組がそれぞれ違う衣装と小道具を持ち、次々と舞台上で踊る「総踊り」という演目は、新城ならではのものです。

そんなのどかな新城も戦禍に巻き込まれ、1945(昭和20)年3月末に洞窟湧泉であるシマヌカー(アラグスクガー)に、住民のほとんど(約300人)が避難しました。米軍上陸5日目(4月5日)という早い時期にそこで一斉に捕虜となったため、比較的犠牲者の少ない集落でしたが、戦後は集落の北側をキャンプ瑞慶覧、南側は普天間飛行場として新城全体を米軍に接收され、



戦後初のマールアシビでの道ジュネー
(1998年)

人々は帰る場所を失いました。1960(昭和35)年にやっと元の集落の一部が開放され、再建の一步を踏み出すことができました。中断されていた「総踊り」も1972年(昭和47)年に字新城郷友会によって復活し、今では郷友会と自治会の協力開催という、伝統文化の継承の良いモデルとなっています。

次のページから、さらに詳しく新城についてみていきましょう!

新城出身の民俗学者

佐喜真興英



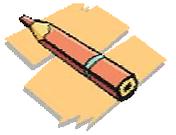
◆◆◆◆ 生い立ち ◆◆◆◆

佐喜真興英は、1893（明治26）年に宜野湾村新城で生まれ、幼少時に佐喜真家本家の養子となりました。本家はとてもお金持ちでした。裕福な家の坊ちゃんとして育てられた興英ですが、幼い頃から体が弱く、内気で小学校の1、2年生まで母親が側にいないと泣き出すほどでした。

しかし、教育熱心な養父母と本人の勉学意欲のもと、中学を首席で卒業するほど成績は優秀でした。大学在学中に『霊の島々』を執筆し、多数の論文を発表、その後『南島説話』や『シマの話』などの著書も出版され、これからの活躍が期待されていましたが、1925（大正14）年、肺結核のため、31歳の若さで亡くなりました。（亡くなった翌年『女人政治考』出版）

◆◆◆◆ 学歴/経歴 ◆◆◆◆

宜野湾尋常高等小学校・沖縄県立第一中学校・第一高等学校（東京）・東京帝国大学法学部（現在の東京大学）/裁判官一司法官試補・判事一（福岡県、宮崎県、岡山県）



◆◆◆◆ 民俗学との出会い ◆◆◆◆

沖縄県立第一中学時に歴史担当の清水駿太郎先生と出会います。この出会いこそが、民俗学へ没頭するきっかけとなったようです。この後、清水先生は民俗学の父といわれる“柳田国男”に興英を紹介しています。柳田国男は興英が亡くなった後、興英の妻、永原松代と共に『女人政治考』の出版に携わっています。

◆◆◆◆ すさまじい研究魂 ◆◆◆◆

興英は高校、大学在学中から民族・民俗学に強い関心を示し、沖縄の文化や社会、精神世界などに関することを精力的に研究しました。『南島説話』の凡例には、「逸話に関する泉が急に増して来て、一時は狂気じみた程夢中になって之を求めた。」と記されています。肋膜炎を患い療養のため帰省しましたが、ほとんど連日民俗調査に出ているという姿からも研究熱心さを垣間見ることができます。それは大学を卒業し、判事となっても変わりませんでした。『シマの話』が発刊された時には病床で涙を流して喜んだようです。

◆◆◆◆ 新城のことを書いた『シマの話』 ◆◆◆◆

1925年に出版された『シマの話』は、興英の故郷である新城のシマの民俗を書き綴った、沖縄最初の単一村落的民俗誌です。明治時代末期の新城の生活や文化を「アラグスクのシマ」「村落共産体としてのシマ」「島人の私有財産的法律関係」「島の家々」「島人の飲食物」「島の年中行事」「出生」「性」「病」「死」「死後」「旅」「島人の言葉遣い及び呼称」「トキ、ユタ及びマジナイ」「雑」の項目に分け細かくまとめています。これを読むとアラグスクの島の結合が極めて強いことや島の政治が男子によって行われたこと、出産が重大視されたことなどがよくわかります。『シマの話』は民俗誌として、当時ではとても画期的なものであるため、沖縄民俗研究の傑作の一つに数えられています。

新城の偉人、佐喜真興英の作品をあなたも読んでみませんか？





資料が記録した 新城の蒲上主



■ 新城の蒲上主

例えば『宜野湾市史』第三巻「市民の戦争体験記録」を手にとって、新城の方々の戦争体験記録を読んでみると、体験者の証言の中からはしばしば「宮城蒲上」という名前を目にすることがあります。その内容とは、すなわち、アメリカでの長い生活経験から「アメリカ軍は民間人を殺さない」などと、シマヌカーに隠れる新城の人々に対して説得をし、一方の米軍に対しては命だけは助けるよう交渉をし、そして多くの人々の命を救った人物である「蒲上主」という具合に。

近年、沖縄県公文書館で公開された米軍側の資料“Okinawa Military Government Detachment, B-5, 1-31 May 1945”（「沖縄島軍政府第 B-5 分遣隊、1945 年 5 月 1 日～31 日」資料コード：0000088412）により、野嵩に収容されていた頃の「蒲上主」に関する記録を確認することが可能になりました。

■ 野嵩のリーダーたち

右に掲載した資料は先ほどご紹介した米軍側の活動報告書の一部です。この資料には本市野嵩に駐留していた分遣隊の活動を通じた見た、1945（昭和 20）年 5 月の一カ月間の「野嵩収容所」に関する諸々の情報が記録されています。

資料には収容される人々の一般的な態度について比較的多くの紙幅が割かれており、「地方統治」の項目には米軍が任命した民間人側のリーダーたち - 「収容所」の住民管理に関して責任を負う - についての記述がならび、資料二段落目より、民間人を管理する「首長」に任命された宮城蒲上さん - 「60 歳、カリフォルニアでの 27 年間に及ぶ滞在経験を持つ」と記録される - をはじめ、「監督代理者」や「配給事務員」、「補助通訳者」によって「キャンプの組織化」が完了したとの記述が見られます。

...stating destruction of homes by shelling, burning and bulldozer and loss by death or separation of family members.

For administration of the civilian population a headman, MIYAGI, Kamao, 60 years old, of 27 years residence in California, was named, after a three weeks experimental period. In addition the B-5 Public Safety Officer named a direct native deputy, MIYAGI, Bushin, aged 64, non-English speaking. These, plus the two food and clothing rationing clerks, and two other English speaking auxiliary interpreters, completed the simple camp organization found sufficient for the functions required. The rigid and arbitrary Japanese authoritarian disposition appeared strangely absent in any of the headmen used or considered. The general attitude of these men were largely similar to the give and take common sense approach to situations which one would expect of American village leaders. Indeed, the fact that some of them had lived in the United States undoubtedly ameliorated their attitudes. One, who lived 33 years, until 1933, in Colorado and Washington, stated in relation to the great decision that had to be made by every Okinawan whether to stay at his house under the U. S. attack or to flee north or south, "Up north in the wild and hilly country it was good hiding, but not good eating. I have three children and a wife, so decided I would take the chance of staying here where there were plenty of sweet potatoes and crops, and risk the death forecast at the hands of the Americans, in order to feed my boys (aged 4, 8, and 11)."

“Okinawa Military Government Detachment, B-5, 1-31 May 1945”
 沖縄県公文書館所蔵（資料コード：0000088412）
 * 原資料より「地方統治」の一部を掲載

■ リベラルな人柄

資料にはこれら野嵩のリーダーたちについて、「厳格で専制的な日本の独裁主義的性質は不思議なことに誰からも確認されなかった」との記述が続きます。このような評価については、「蒲上主」と呼ばれ、地域の人々からの信望の厚かった蒲上さんがリベラルな人柄の持ち主であったことをうかがわせるものですが、その一方で、「彼等の何人かが合衆国で生活したという事実は、疑いもなく彼等の態度を改善させた」（傍点は引用者）と言い切る米軍側の認識については、やはり多くの問題点を孕んでいると言わざるをえません。

その後、米軍の通訳を務めた宮城蒲上さんは、軍から廃材や発電機を調達してくるなど、戦後新城の「帰村アシビ」を成功させた功労者としても人々によく記憶されています。

ぎのわんムラ紀行 ～新城編～

「ぎのわんムラ紀行」の第二回目は、新城です。戦前の新城は、耕作地面積が広く、また海外移民が多かったため、裕福なムラとして知られていました。中頭きっての富豪や、著名な沖縄研究者で法律家の佐喜真興英を輩出したムラでもあります。新城は沖縄戦で破壊され、更に集落が普天間飛行場に、北側の耕作地がキャンプ瑞慶覧に接收され、多くの土地を失いました。今回の「ぎのわんムラ紀行」では、戦前の新城の自然環境や祈りの場、伝説の地などのいくつかを紹介します。



新城下原第二遺跡の発掘作業の様子
(『新城下原第二遺跡』から掲載)

キャンプ瑞慶覧内の遺跡
その昔、新城の集落はキャンプ瑞慶覧の下方にあったと伝わります。屋敷囲いの石垣や石畳道、などが確認されています。また近隣には、新城下原第二遺跡もひろがっています。(p.6 参照)

カンナシー
その昔、新城と安仁屋の村は近くにありました。新城と安仁屋の間にカンナシーという岩があり、「安仁屋をひっくり返せ、新城を縛りつけろ」と叫んだため、新城は現在の普天間飛行場の辺りに移動してきたと伝わります。(p.1 参照)

現在の行政区界



新城の位置

- 現在の新城区
- - - 戦前の字新城
- 遺跡の範囲

石原家のガジマル

新城の屋号：石原の屋敷内に生えていたガジマルの大木です。とても大きく、戦前は浦添からも見えたそうです。周囲の家々に覆いかぶさるように枝葉を伸ばしていましたが、神ガジマルであったので、枝はムーチーの日にしか切ることができませんでした。

アシビナー
マールアシビは、戦前は集落北側のアシビナーで催されていました。戦後、アシビナーは普天間飛行場に接收されましたが、マールアシビは現在でも場所をかえ、新城区内の新城郷友会事務所前広場や普天間第二小学校などで行われています。(p.1 参照)



郷友会事務所前広場
新城郷友会事務所隣の拝所と慰霊塔

シマヌカー

洞窟を整備した新城の共同井戸です。洞窟内に降りて行き、水を汲みました。

戦時中は約300人の人々が避難していました。アメリカ帰りの宮城蒲上さんが米軍と交渉し、避難した人々は捕虜となり助かりました。(p.1, p.3 参照)



シマヌカーの入口(左)と内部(下)



遺跡が語る新城集落

はじめに

新城は南北に細長い集落でキャンプ瑞慶覧^{ずけらん}と普天間飛行場の両方に土地を接収されています。

この地域に人々が住み始めたのは今から約7,000年前にまで遡^{さかのぼ}ることができます。それ以降、人々は定住地を変えながら、徐々に増えていったものと思われます。

現在、新城と名のつく遺跡は10カ所確認できます。その中から代表的なものを紹介します。

新城下原遺跡

キャンプ瑞慶覧のイシジャー下流の標高27mの丘陵にあります。貝塚時代前期(約3,000年前 縄文時代相当)の貝殻が多く堆積した土より、当時の土器や離頭銛^{りとうもり}(県内では唯一)が見つっています。



離頭銛 根元の穴に縄が付けられていて、獲物を突くと銛が外れ、弱まったところを手繰り寄せます。

新城下原第二遺跡

キャンプ瑞慶覧内のイシジャーの下流域、標高4～6mほどの平地に広がっています。約6,000～約7,000年前の爪形文土器^{つめがたもん}や貝塚時代前期の土器が見つっています。他には貝塚時代後期(約2,000年前 弥生時代相当)のイモガイ集積(日本本土との交易品)や土器等、グスク時代(約700年前 鎌倉時代相当)の水田跡が見つっています。とりわけ水田跡は県内での初めての事例として注目されています。



爪形文土器 表面に爪を押し付けたような文様からこの名称がつけられています。沖縄で古い部類の土器とされています。

新城^{シチャヌトウン}下殿遺跡

これもキャンプ瑞慶覧のイシジャー下流標高27mの丘陵上にあつて、新城下原遺跡と接しています。屋敷跡や石畳道が残っています。この屋敷跡は戦前の新城集落に移転する前の集落とされ、このことは佐喜真興英の『シマの話』にもあります。また遺跡からはグスク時代の土器や中国産の陶磁器が見つっていて、グスク時代の集落も想定されています。ここに住んでいた人々は、眼下に広がる新城下原第二遺跡の水田跡の主であったかもしれません。



水田跡 白線が引かれた区画が水田の畦と考えられています。一部にこの区画に沿って木杭や石列が配されていました。

新城古集落

普天間第二小学校の南側に位置する、琉球王府時代にできた計画的な碁盤目^{ごばんめ}型集落で、戦前の新城の方々の生活の場でした。新城下殿遺跡からここに移ったと伝えられています。現在は屋敷林と石垣などが表面に見られる程度ですが、1992(平成4)年度の発掘調査の際には、多くの溝跡や柱穴などが見つかり、地中には当時の生活跡がよく保存されています。



羽衣伝説の天女を探せ!!

博物館イメージキャラクター
天女ちゃん

美しい羽衣をまとった天女が出てくる「羽衣伝説」は沖縄のみならず、日本各地、あるいは世界各国にも存在する話ですが、ここ宜野湾市にも有名な伝説があります。その内容は、森の川で奥間大親という人が美しい羽衣を見つけ、倉に隠しますが、それは水浴びに来ていた天女のもので、羽衣を失った天女は天に帰る事が出来なくなってしまいます。その後、天女は奥間大親と夫婦になり、一男一女をもうけますが、ある日娘の弟をあやす子守唄で羽衣のありかを知り、天に帰ってしまうといったものです。

このような伝説がある宜野湾市には美しい天女像がいくつも存在します。今回は市内で見られる天女像を場所(地図 QR コード)とともに紹介していききたいと思います。



⑤真志喜ポケットパーク
羽衣天女の話と、天女の子である察度が国王になるまでの物語を表現しています。



⑥森の川公園
天女伝説の地にある天女像です。近くに泉があります。



⑦宜野湾市立博物館
博物館内ロビーの上部にあるステンドグラスの天女です。



天女伝説の地
森の川の泉



～宜野湾市天女マップ～



①宜野湾市役所(正面)
宜野湾市役所正面にある天女像です。



②宜野湾市役所(ロビー)
「羽衣の像」という名前の天女像です。



④宜野湾市市民会館(2階)
市民会館の2階の壁に展示されている天女像です。



③宜野湾市市民会館(1階)
大ホールの緞帳(どんちょう)で、與那覇朝大氏のデザインです。

宜野湾市の天女像のほとんどは、宝冠と瓔珞(装身具)を身につけた姿で羽衣をまとい、左を向き横笛を吹きながら宙を舞うような構図をとっています。この天女の構図は『市史だより がちまやあ』第22号でも紹介した山田真山画伯の天女の構図の原画を元に製作されているようです。(※レリーフ(彫刻)の制作は辻志郎氏)

山田真山画伯以外にも、宜野湾市に縁のあった芸術家達(與那覇朝大氏や名嘉睦稔氏)も美しい天女を描いています。このような美しい天女像が多いのも、独創的で魅力ある羽衣伝説が芸術家達の想像力をより一層逞しくしているからかもしれません。皆様にも今一度天女伝説に思いを馳せながら、地域に点在する天女たちを探してみることをおすすめします◎



山田真山画伯の天女図



宜野湾市史事業報告



☆ 企画展「沖縄戦と基地」の開催

去った6月15日（水）から7月3日（日）にかけての17日間、宜野湾市立博物館で、「沖縄戦と基地」と題して、企画展を開催しました。

企画展は沖縄戦とその結果生み出された基地をテーマとしたもので、戦前・戦中・戦後の生活がどのように変容したかを写真パネルやモノなどを中心に企画・展示しました。おかげさまで、入場者数は延べ944人、他県からのお客様もお越しくださいまして、昨年より多くの来場者でした。ありがとうございます。



写真パネルを観覧する子ども達

☆ 「伊佐浜土地闘争」聴き取り調査の実施

8月23日、25日の両日、戦後資料編Ⅱ「伊佐浜土地闘争」の聴き取り調査を行いました。

今回、当時の貴重なお話をしてくださったのは、野嵩高校（当時 現普天間高校）に在籍していた先生、生徒の皆さまです。米軍占領下の沖縄において、とりわけ「暗黒時代」と称されるほどの厳しい時代だった1950年代半ばにありながらも、米軍占領に対する抵抗を試みていた野嵩高校の若い世代の問題意識が、当時最大の政治的・社会的問題であった「伊佐浜」へと向けられていったのは、決して偶然ではなかったはずです。

調査にご協力してくださった話者の皆さま、並びに今回の調査を担当してくださった鳥山淳先生をはじめとする沖縄国際大学平和学ゼミの皆さまに、この場を借りて深く感謝を申し上げます。



調査風景（8月25日）

☆ ミニ古地名展の開催

古地名調査事業では、平成18年度から平成22年度まで、市内の内陸部旧17カ字を対象に戦前の屋号、山、井戸、畑の名前などの地名の聴き取り調査を実施してきました。そして、調査成果をまとめ平成22年9月から、市内の各公民館でミニ古地名展示会を開催してきました。

展示会では、調査成果を地元の方々にお届けするとともに、市史編集係でまとめた内容の確認と補足をしていただきました。その展示会も、8月に開催した普天間一区公民館を最後に、すべて終了いたしました。これからは、報告書の刊行に向けて全力で取り組んでいきます。

調査から展示会まで、お忙しいなか協力していただいた自治会・郷友会・地域の先輩方、ありがとうございます。



展示会の様子（野嵩一区）



屋号地図の確認中（嘉数区）